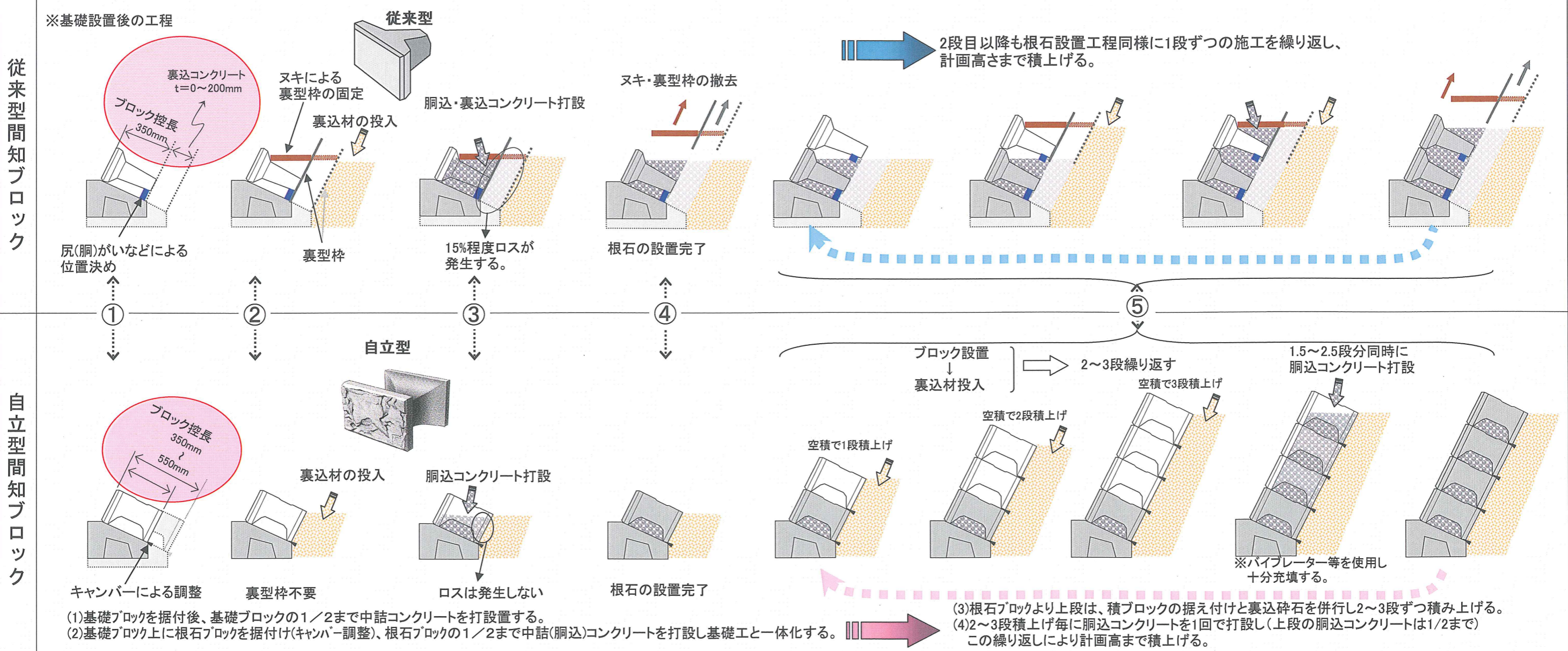


図 従来型間知ブロックと自立型間知ブロックの施工工程比較



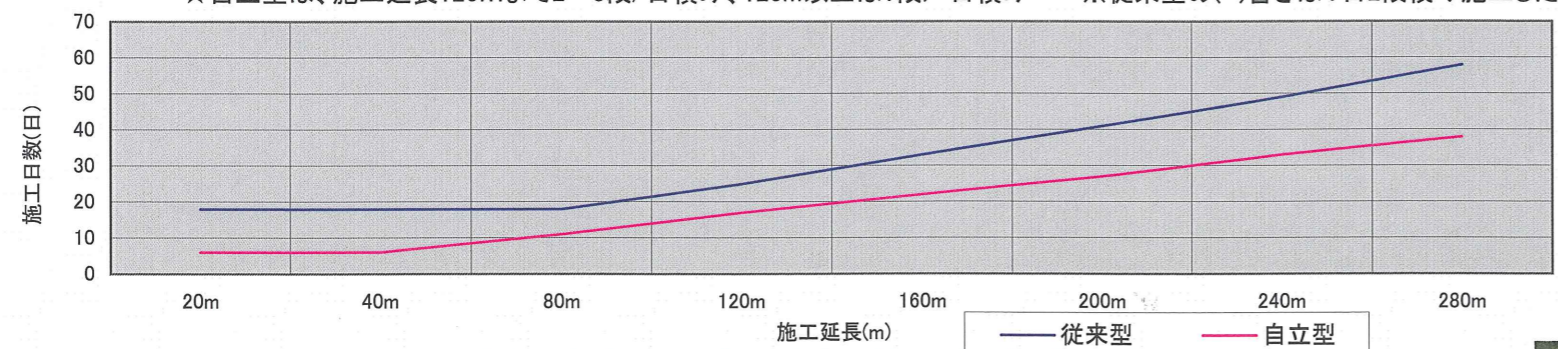
【自立型間知ブロック使用によるメリット】

(1) 1日の施工性が良く、**工期の短縮**が可能である。(別紙施工工程比較図 参照)

[法長4.50m(18段)施工した場合の例]

施工延長	20m	40m	80m	120m	160m	200m	240m	280m	日の施工面積(注)
従来型(1段積)	18(9)日	18(9)日	18(16)日	25日	33日	41日	49日	58日	22m ² /日(標準)
自立型(3段積)	6日	6日	11日	17日	22日	27日	33日	38日	33m ² /日(標準)

☆自立型は、施工延長120mまで2~3段/日積み、120m以上は1段/日積み ※従来型の()書きは1日2段積み施工した場合の日数。



☆延長と法長に比例して、自立型間知ブロックと従来型間知ブロックとの工事日数の差は大きく開く。

- 1日に2~3段積み上げが可能である。
- 裏型枠の設置・取り外しが不要である。
- 積ブロックの前面壁と控壁が同じH型で安定性がありキャンバー等による微調整で固定できる。
- 据え付け作業に熟練工を必要としない。

- 自立型は胴込コンクリートの打ち継ぎ面が少なく**壁体強度の弱点が少ない**。
 ・従来型: 1段毎に胴込コンクリートの打ち継ぎ面が生じる。
 ・自立型: 2~3段毎に胴込コンクリートを打つため継ぎ面が1/2~1/3に減少する。
- 現場で発生している**経費の差**
 ①裏型枠
 ・自立型: 裏型枠の材料費(損料)が不要である。
 ・従来型: 引抜き型枠の損料が発生する。
 ②作業員の手待ち(ロス)
 ・自立型: 連続作業できるため、作業員の手待ち(ロス)が少ない。
 ・従来型: 現場の施工条件によって作業労務の手待ちが生じる。
 ③生コンのロス
 ・自立型: コンクリートの打設回数(2~3段毎)が少なく、コンクリートのロスが少ない。
 ・従来型: 積(張)ブロックでは、施工性に重きを置き生コンクリートのロス量が多い。
 (+25~+30%)
- その他
 ・自立型: 工事日数の短縮による現場仮設費及び管理費が縮減できる。
 作業工程の段取替や生コン搬入待ちなどによる現場の施工時間のロスが少ない。



備考